

Title	コンバウン王朝時代(その三)
Author(s)	服部, 正一
Citation	大阪外国語大学学報. 38 p.79-p.91
Issue Date	1977-03-15
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80609
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

コンバウン王朝時代（その三）

服 部 正 一

“The Period of Konbaung Dynasty” III

Masaichi HATTORI

န မေ ဘ တယ ဘ ဂ ဝ တေ ဘ အ ဂ ဟ တေ ဘ သ မ္ပ ဘ သ မ္ပ ခွ ယ

၍ ဆေ ဘ င်း ပါး ဌ် တင်ပြလိုသည့်အချက်အလက်များမှာ၊ ယေဘုယျအားဖြင့် ဘိုး တေ ဘ ဘုရား နှင့် ဘကြီး တေ ဘ ဘုရားတို့၏အကျိုးအကြောင်းများဖြစ်ပါသည်။

ဘိုး တေ ဘ ဘုရားလက်ထက်တွင် ပြည်တွင်းပြည်ပ စစ်ပွဲများ ဆင်နွှဲ ကြောင်းကို တွေ့ရသည်။ ၎င်းစစ်ပွဲများသည် ရခိုင်ပြည်၊ ဟိုင်းဒယားပြည်၊ မဏိပူရပြည်၊ အသံပြည်တို့ နှင့် ဆင်နွှဲရသော စစ်ပွဲများဖြစ်၏။ လွန်ခဲ့သော နှစ်တွင် ရေးသားဖော်ပြခဲ့ဘူးသည့်အတိုင်း ရှေးဦးစွာ ဘဂဂဒုနစ်၌ ရခိုင်ပြည်နှင့် စတင်ဖြစ်ပွား၏။

ဘိုး တေ ဘ ဘုရား၏ ဆေ ဘ င် ဂွက်ချက်များကို ဝေဖန်ရသော် ကောင်းကျိုးဆိုးပြစ် နှစ်သွယ်စလုံးကိုရရှိကြောင်းကို တွေ့ရ၏။ အကျိုးကျေးဇူးအားဖြင့် တိုင်းပြည်စီးပွားရေး၊ သဘာဝရေး၊ ပညာရေး၊ စာရိတ္တရေး အစရှိသည်တို့ကို ကောင်းမွန်စေခဲ့၏။ အပြစ်ဒေါသအားဖြင့်ဆိုရပါလျှင် ဘိုး တေ ဘ ဘုရားသည် ရခိုင်ပြည်သားများနှင့် တိုင်းသူပြည်သားများကို အတင်းအဓမ္မ ဆင်ခေါ်၍ မင်းကွန်းစေတီ တေ ဘ ကိုတည်စေခြင်း၊ မင်းကွန်းခေါင်းလောင်းကို သွန်းလုပ်စေခြင်းတို့ကြောင့် ရခိုင်ပြည်သားတို့က အကြည်ညိုပျက်ခဲ့၏။ ထို့ကြောင့် စည်းရုံးညီညွတ်ရေးကို ပျက်ပြားစေခဲ့သည်။ ထို့ပြင်စီးပွားရေးနှင့် ပတ်သက်၍ နိုင်ငံခြားသို့ ဆန်စပါးနှင့် ရွှေငွေ ကျောက်သံပတ္တမြားများကို မတင်ပို့ရဟု အမိန့်တေ ဘ ထုတ်သောကြောင့် အရေးအဝယ်လျော့ပါးခဲ့ရ၏။ ၍သို့အားဖြင့် တိုင်းပြည်စီးပွားရေးနစ်နာခဲ့ရသည်။ ထို့ကြောင့် ဘိုး တေ ဘ ဘုရား၏ ဆေ ဘ င် ဂွက်မှုများသည်၊ အကျိုးအပြစ်နှစ်ရပ်စလုံးကိုခံစားရပေသည်။

၁၈၁၃ခုနှစ်က အမေရိကန်သဘာဝသမ္မတပြည်မှာ "ယူဒေန် (ရုစင်)" သည်
ခရစ်ယာန်သဘာဝသမ္မတပြည်မှန်မပြည်သို့ ရောက်လာ လေ၏။

ဘိုး ဖော်ဘုရားလက်ထက်၌ မြန်မာစာ ပေသည် ထွန်းကားခဲ့၏။ အဘိဓိက္ခဏ်းဦး ပေ၇
ဦး၊ တွင်းသင်းမင်းကြီးဦးထွန်းညို၊ ဝက်မစွတ်နဝဒေး၊ လက်ဝဲသုန္ဒရအမိတ်၊ ရာမ
ရကန်ဦးတိုး၊ မင်းဘူးဆရာတော်ဦးဩဘာသ၊ စာဆိုတော်မယ်ရွှေ၊ မင်းကြီးကတော်
ခင်ဆုံတို့သည် ထင်ရှားသောစာဆိုများဖြစ်ကြ၏။

ဘိုး ဖော်ဘုရား၏ပြင်ပသက်ဆိုင်ရေးခန်းကိုအကျဉ်းအားဖြင့် ၁၀၈၆ ခုသော်
လူနုနုနှင့် ဦးသက်သက် ရေး၌၄င်း၊ သီတိုဇ္ဇိနုနှင့်သက်သက် ရေး၌၄င်း၊ ထူးခြား
သောအမည်မပြေမှုများကိုမ ဖွဲ့၍ ပေ။ သို့သော် ဗြိတိသျှတို့နှင့်သက်သက် ပေး
၌မူကား အမည်မပြေမှုများကို များစွာ ဖွဲ့ရသည်။ ဤအမည်မပြေမှုများသည်
အင်္ဂလိပ်-မြန်မာစစ်ပွဲဖြစ်ပွားရန်အကြောင်းအချက်များပင်ဖြစ်လေသည်။
ဆိုကြောင့် အင်္ဂလိပ်-မြန်မာစစ်ပွဲဖြစ်ပွားရခြင်းတွင် ဘိုး ဖော်ဘုရား၏
နိုင်ငံရေးသက်ဆိုင်မှုအားနည်းခြင်းသည် အခြေခံအချက်ကရိတ်ဖြစ်ပေသည်။

ဘိုး ဖော်ဘုရား၏လေးနန်းအမွေကို မြေးတော် (ဘကြီး ဖော်ဘုရား) က ဆက်
ခံလေသည်။

အင်္ဂလိပ်-မြန်မာပထမစစ်ပွဲဖြစ်ပွားရခြင်း၏အခြေခံအကြောင်းရင်းများ
ကိုရှာဖွေသော် ဤသို့သောအကြောင်းရင်းများများရှိသည်ကိုတွေ့ရသည်။ ထိုသို့
အကြောင်းရင်းများရှိနေသည့်အတွင်းတွင် စစ်ပွဲမစွဲမသွေ ပေ၇ ပေါက်ရန်
အလို့ငှါအသိအရေး၊ မဏိပူရအရေး၊ ရှင်မဖြူကုန်းအရေးတို့ ပေ၇ ပေါက်ခဲ့
ပြန်လေသည်။

前号よりのあらまし

ボードーパヤー王の時代は国の内外に騒然とした零屈気がただよい、戦闘の多かった時期であ
る。それらの戦闘はアラカン、タイ国、マニプール、アッサム等の遠征であった。これらの遠征
について英人史家とビルマ人史家との間には多少ボードーパヤーを評する見解に相異はあるが、
ビルマ人史家でさえボードーパヤーの好戦的意図には批判的な見方をする人が多いようである。

彼が引き起した戦役のため、ビルマ人は泥沼に入り込んでしまった。先づ、アラカン征服したが（学報37号，29～30頁），そのために英領に接する地域にて摩擦が生じ，また，アッサムやマニプールの事件に手を出し，侵入干渉したためイギリスとの紛争の種を播いた。その上，タイ国との戦闘では全く無益な結果に終り，ボードーパヤーの作戦の拙劣さを明白にした（学報37号，30頁）。その他の戦役もビルマ国民にとって何ら利益をもたらすどころではなく，その罪の結果を擔負わされたに過ぎないのである。

ボードーパヤー王の文化上の業績

騒然としていたビルマ国内に秩序が回復されるや，ボードーパヤーは行政に取りかかった。1784年に一般の租税調査を命じ，国中の市長や村長は国王が任命した長官の前に出頭し，彼らの管区の境界線に関して，その人口，産物，収益等の詳細な報告書を提出せねばならなかった。それは1638年タールン王の時代（学報32号，27頁）に行なわれて以来，はじめて施行されるものであった。その調査経過を編さんした記録の多くは今日尚残存し，当時の歴史資料を提供するものである。例えば，それによると，当時のビルマの全人口は2百万に充たなかった。詳しくは，1,831,467名と示されているが，その数は英人・ビルマ人史家とも一致している。但し，タニンダーリーとアラカンを含して17万，その他の小民族諸種族を合算すれば3百万に近かったのではないかと云うことである。

当然，王のねらいはその収益の増加にあったが，その記録は法律上の要求を確立するにも有効であった。それ以上の調査は1803年に行なわれた。

ボードーパヤー王時代のビルマにおいては，ホールも指摘する通り（P. 93），サクソン時代の英国における如く，「税は人民の王であった。」そして，その文書の布告は地方官吏の搾取の引止め役となったであろう。というのは，当時の官吏の横暴は庶民にとっては国王のそれ以上にひどかったにちがいない。

ボードーパヤーはマンドレー地方のナンダ湖，アウンビンレー湖，マウンマガン湖，及びメティラ湖の堤防を修築した。それによって乾燥地帯にも農業の発達を促進させた。そのうちでもメティラ湖の修築は最大の難事業で，シャン，アラカン，モン等の諸種族に強制労働を課し，王自身が監督に当って，成ったものであるという。また，交通の便を容易ならしめるためにミンプーの河岸よりアラカンに通ずるパーアインの谷間に道路を造った。

ボードーパヤー王は仏教の面にも熱心な人であった。アラカン遠征が終った頃，アラカンより運び去ってきたマハー・ミヤムニ・パヤーをマンドレーに建立して，それを礼拝した（学報37号，30頁）。これはアラカン・パゴダという別名によってよく知られている。その他，王は数十基ものパゴダを建立したが，その最大のものはサガイン地方（マンドレー北部）のミングン・パ

ゴダであって、その大きさは全く驚くべきものであった。（ウ・ティン・ウ(P. 226)によれば、それは完全にはでき上がらなかったということである。）その近くに^{ミン}Min: ^{グン}Gun: ^{カウ}Hkaung ^{ラウ}Laung: ^{ウイス}(ミングン梵鐘)を鑄造した。その大梵鐘はウ・ポチャーによれば(P. 219), 55,555 Viss (約80トン)の重さがあり、口の広さは12^{タウン}Taung (約110インチ), 深さ約130インチであって、当時世界第二番目に大きい鐘であった。その頃、世界最大のものはロシアにあったが、大戦中に兵器を造るためにこわされてしまったので、現在ではミングン梵鐘が世界最大の鐘であるとのことである。

「梵鐘」について

「梵鐘」は銅を主とした合金製で、パゴダの段状の上の部分（ビルマ語^{パウン}Hpaung: ^{イツ}yit）を形どったもので、ちょうど湯呑み茶碗をふせた形に似ている。中国の古楽器の鐘に対し、寺院で用いられるつりがねの称であり、「梵」はサンスクリット語の「神聖、清浄」を意味する brahma の音訳である。その別称も多く、日本では、鯨鐘・洪(おお)鐘・釣鐘・蒲牢・甕鐘(ふしょう)・長鯨・巨鯨・華鯨など(広辞苑)である。梵鐘は大小種々なものが世界各地にあるが、寺西五郎氏「語理語源」142～150頁の「鐘つきの数学」の項の中で、日本最古の「梵鐘」は京都妙心寺浄金剛院にあり、文武天皇二年(698年)の鑄造にかかる。これに次ぐのは奈良興福寺にある神亀4年(728年)のもの、越前織田神社の神護景雲4年(771年)のものである。また、世界最古の鐘は古代バビロンの遺跡から発掘されたもので、コップ型の小さい鐘である。これは紀元前3世紀のものと推定されている。実に鐘（ビルマ語 Hkaung: Laung:）と云っても種々なものがある。ついで乍ら、往古へブライの高僧は衣服に黄金の鈴と鐘をつけ、またエジプト、アラビア、ペルシャなどの諸国では、婦人が衣服や、そのすそや足首などに、鈴や鐘をつける風習があった。アツシリアの彫刻や聖書によると、家畜にも鐘をつけていたようで、更に、ギリシア・ローマの時代になると、軍馬とか戦車にも鐘をつけた記録がある。また、パゴダの先端につけられてあって、夕暮になるとそよ風にゆられて妙音を立てる鳴鐘はサガイン丘などにて聞く者の耳に郷愁を感じさせるものである。

1802年、宗教使節の一行がセイロンから渡緬した。その理由は当時セイロンの王は受戒を農民階級までに限定していたので、それより以下の階級の者は憤り、沙弥のうちの数名はビルマに渡った。ボードーパヤーは彼らに謁見し、王自身が大僧正に彼らを引き合わせて、アマラブラにて受戒せしめた。彼らは5名を一団とするビルマ僧と共にセイロンへ帰り、これら5比丘は尚授戒に努め、セイロンにてアマラブラ流派を設立し、今日なお教団内における階級主義に抗している。このようにして上座部仏教を逆輸入した結果、上座部仏教団でのビルマ教団の権威は著しく高まった。

ところが、当時、偏祖派（ Atin-gaing: ）と通肩派（ Ayon-gaing: ）の意見が対立して、シンビューシン王の頃より決定されていなかった仏教団の統一問題に関し、両派を論争させた結果、偏祖派が典拠の欠如を認めたため、ボードーパヤー王はすべての上座部僧に対し通肩派への統一を命令した。ここにビルマ上座部教団は統一されることになった。さらに王は教団の分裂がこれ以上くり返されないように、4人の大長老と8人の僧伽主からなる仏教長老会議をつくって、国内の僧伽を統一指導する機関とした。

ボードーパヤー王はアラカン・パゴダの附近にて6百余りもの碑文を集めた。それによって、王は僧侶たちが寺院所属地として余りにも多くの土地を所有していることを知り、寄進について記録した刻文の調査を命じ、それらの写しを作成せしめた。その蒐集されたものは史家にとっても貴重な宝であったが、幸いにもそれは Twin-^{トウイン}Thin-^{ティン}Min-^{ミン}:-^{ザー}Gyi:（別名 Twin-^{トウイン}Thin-^{ティン}Taik-^{タイ}Wun^{ウン}）（1726～92）という僧侶に委ねられていた。彼は1752年にイワンが滅亡する以前に還俗し、アラウンパヤーはボードーパヤーの師に任じていた。そして、ボードーパヤーは王位に即いたとき、彼を穀倉奉行に任じ、宝石をちりばめた杖と共に多くの称号を彼に与えた。彼は大著 “Yāzawin-^{ヤーザウイン}thit^{ティット}” という歴史書を著わしたが、その著作に対しては彼の碑文の知識によって十分な評価がなされる。

ビルマにおけるキリスト教宣教師の伝道について

1813年、Judson 夫妻が来緬して、小規模の布教を始めた。彼のビルマ語発展への貢献は大きいものであった。殊に彼の編纂した緬英辞典は種々なビルマ語辞典のうちで我々日本人にとっても最も親しみ易いものである。

Adoniram Judson（1788～1850）は初めメソジスト派の信仰復興運動に刺戟されて、インド伝道を志すが、Claudius Buchanan の “The Star in the East” を読むに及んでますます海外伝道の決意を固めた。しかし、インドへの航行中バプテスト派信仰に回心する。夫妻はインドにて宣教する積りでアメリカを出たのであるが、イギリス人によって直ちに追放された。というのは、当時、東インド会社のイギリス人たちはキリスト教の導入がインド人たちの固定的、停滞的社会に余計な波を立たせてほしくなかったからである。1806年の Vellore の反乱に宣教師たちが加わっていたというインド人たちの主張から、イギリス側は宣教師には圧迫的態度をとるようになったのである。

キリスト教宣教師は帝国主義者の尖兵となって、未来社会に乗り込み、彼らの侵略の基地を造つた。ビルマにおいても宣教師たちはイギリスとビルマの政治的軋轢の谷間で、生きて来なければならなかった。しかし、彼らを支えていたのは遠隔地にまでやって来て自分たちの信仰を証する情熱と勇気だと思われる。俗にキリスト教は「言葉の宗教」と呼ばれる。それは聖書を武器とするので、聖書を伝える言葉—翻譯—がなければ布教自体が全くゆきづまってしまうからであ

る。どこの国の宣教史においても、聖書を伝えるということは文字を学ばせるという教育の普及と相まって行われた。宣教師たちの教育への情熱の入れ方に並々ならぬものがあるのもこの理由からである。帝国主義者たちが私腹を肥やしている間に宣教師たちは教育を通じて、英語や西欧文明の紹介等、血のにじむような苦勞をしていた。18-19世紀を通じて、Judson に代表されるような宣教師たちは西欧が生んだ偉大な良心である。

ビルマにおける初期キリスト教伝道については学報28号、85-86頁にてもふれたが、ビルマにおいてカトリック教会が設立されたのは1721年で、聖パウロ教団の布教開始の年である。この1721年を境として、ビルマにおけるキリスト教伝道史では、それ以前を第一期、以後を第二期として通例定められている。第一期については詳細な具体的史実の記述が見当り難く、主として第二期に重点が置かれている。但し、第一期のうちでもパリ外国伝道会ジュヌーの *Jenoud* 及び *Goret* ジョレ の両宣教師の殉教については特筆に価するものがある。彼ら二名はかねてタイ国にて伝道に従事していたが、当時タイ国にいたタライン人及びビルマ人の捕虜が彼らの教えを受けた関係により1689年招かれてシリアムに到り、ささやかな病院を開設して伝道に努めた。しかるに彼らはビルマ僧の排斥にあい、告発されて裁判に附され死刑の宣告を受けた。両名は1693年、裸体にされて蚊の食うにまかされた後、袋に縫い込められてインワ近くの河中にて溺死させられた。その後、1721年までは、キリスト教伝道師のビルマを訪れる者はなかった。そして、1721年以後、即ち、第二期に入っても牧師の数は二名以上ビルマに駐在することはめったになかった。一名はランゲーンに、他の一名はシュエボーのバリンジ村（ヨーロッパ人を収容してあった村）の宣教に当たった。王朝時代のビルマではキリスト教の宣教は不可能と云ってよいほど困難であった。その理由の一つとしてはビルマ王がキリスト教に対し特に反対であったというのではなく、外国人たちを疑い、村々を徘徊してほしくなかったからである。

1721年、二名のイタリア人伝道師が渡緬した。一名はバルナバ派の僧カルキ、と他はヴィットーニであった。彼らはポルトガル僧侶の讒訴に悩まされたが、当時のビルマ王タニングヌエ(1714-33)は両者を引見し、彼らに託して法王に贈物を呈し、且つ国内伝道の便宜を与えた。それ以後、1829年までイタリア・バルナバ派の統制下に少くとも一名の伝道師だけはビルマに常駐していた。

キリスト教諸派のうち、ビルマにおいて最も勢力を占めていたのはアメリカ・バプテスト教会とローマ・カトリック教会とであって、特にバプテスト派は単に布教においてのみならず、教育面においても長い歴史を有し、最近まで多数の Mission School を経営し、全ビルマキリスト教徒の64パーセント弱を占めていた。

ウ オバタ U Awbatha について

ボードーパヤー王の時代にはビルマ文学が大いに栄え、殊に著名な文豪 U Awbatha が出現し

て、十大 ^{ジャタカ}Jataka の散文訳を書いた。彼はミンブー県にある僧院にてそれを書いた。十大 ^{テミヤ}Jataka は仏陀の前世物語550のうちでも10が特に顕著で、それらは ^{ザナカ}Temiya, ^{トウウォンナタマ}Zanaka, ^{ネミ}Thuwannathama, ^{マホータダ}Nemi, ^{ブリダッ}Mahawthadha, ^{サンダクンマ}Bhuridat, ^{ナラダ}Sandakumma, ^{ウィドウラ}Nārada, ^{ウエタンダヤ}Widhura, , ^{ザツ トー チー セ ビヤー}Wethandaya であって、^{ザツ トー チー セ ビヤー}Zat- taw- gyi:- hse- bya と呼ばれ、散文劇として書かれてある。

U Awbatha に関しては、ビルマ古典作家として余りにも有名であるが、概略すれば、彼はボードーパヤー王及び彼の後継者バチドー王の時代に生きた僧侶であった。彼は学問の隆盛期に生き、彼の敬神的態度、宗教に関する学問、サンスクリット語及びパーリ語の知識等のために名声を博し、彼の同時代の人々と同じくビルマ語にて著作することを選び、彼以前におろそかにされていたビルマ語の散文を豊かにした。当時の学者たちはやはり散文より韻文に多くの関心を示し、彼らが散文を書く時でも、彼らは決して本質的には韻文作家であることを忘れなかった。そして、つり合いのとれた韻律的な語句そして豊富な比喩的表現を好んだ。彼らは何か強烈な感情を表現しようとした時には直ちに詩を作った。また彼らはしばしばより適当なビルマ語で表現できる時でも彼らの文章の中にパーリ語を混入した。U Awbatha 以前のビルマ語の散文は、^{マウン}Maung ^{ティン アウン}Htin Aung も述べている如く (Burmese Drama, P. 54), 英文学に例をとれば、John Dryden 以前の英語の散文と同じような位置にあったであろう。U Awbatha は表現豊かな、明晰な、純朴な、しかも効果的な散文を生み出した。彼の作品はもちろん今日でもよく読まれ、人々に好まれている。ビルマ語及びビルマ文学研究にとって U Awbatha の重要性はラングーン大学文学部前期及び教養学部 of ビルマ古典文学作品の教科書として用いられているという事実からも判断することができる。彼は物語の内容に関してはパーリ語原典に近く、しかも作中の人物を詳細に描写し、彼らを生けるが如く、興味尽きないほどに描き、人間の心理を適確に理解していることを示した。

その他、^{ウ トー}U To:, ^{ウ ポーウ}U Paw U, ^{ウ サ}U Sa, ^{ウェツ マスワツ ナワデー}Wet-Maswat-Nawade:, ^{メ コウエ}Me-Khwe, ^{キン ソン}Khin-Hson 等の詩人・学者が現われた。また、レッツウエトングラ (学報34号56頁) はボードーパヤー王統治の末まで存命し、宮廷における裁判官の一人として王に仕え、また詩人としても名を残した。

ボードーパヤー王の経済政策

諸外国が会社組織によって経済的に豊かになっていることを聞いて、ボードーパヤーはその組織をビルマにも移入しようと決心した。しかし、王は株式会社の組織やその性質がどのようなものであるかを理解せず、それが独占会社であると考え、あらゆる種類の商品を専売業者に売り始めたので、暴利を獲得しようとする者たちのために、一般庶民は非常な迷惑を蒙った。すべての品物は、市場の野菜に至るまでも、王命によって束縛されるとなると、ほとんどの商売ができなくなった。ビルマの殷賑産業であるべきはずのチーク材も独占会社が僅か30万ルーピーで売るほどの少ない量が輸出されただけであり、そのチーク材だけが輸出し得る唯一の品物であった。とい

うのは、当時のビルマには加工生産品は何もなく、しかも大ていの原料物資の輸出は禁止されていた。その理由としては、人民の衣料に不足するようなことがあってはならないから絹は輸出してはならぬ、とか、米は人々が餓死してはならないから輸出してはならない（その実は人と家畜がいくら食べても食べ切れないほど生産されていた。）また、金や宝石は国が貧困になってはいけなから輸出してはならない。馬はこの国にいなくなてはいけなから輸出してはならない。等々であつた。

ある国で貿易をするためにやってくる商人はその支払を金銭で受けとるか、または品物で受けとるかの二つの方法がある。しかし、ビルマの場合は、価値のあるほとんどすべての品物は輸出を禁じられていたので支払を物で受取ることができないし、また、金銭を持ち出すことも禁止されていた。唯残された一つの受取方法は、金銭をビルマ国内にて消費する道を講じなければならないことであつた。例えば、船を建造して現地の労働者に利益を得させるようにするのであるが、それが正にボードーパヤーが意図していたことであつた。しかし、また一方、そのような王の意図に反して外国商人がビルマへ来ないようになることもあるので、それは王の望むところではなかつた。ビルマの周辺には幾多の港があつて、そこでは商人はもっと有利に金銭を使うことができた。

しかし乍ら、ボードーパヤー王のこのような考え方は彼のみに限つたことではなく、歴代の先王たちも採つたであろうような政策であつた。従つて、実際にはこの禁止令は強行され得なかつた。というのはその適用には種々な特例が設けられ、上手な言い逃れが行なわれることが常であつた。しかし、貴金属の場合は、その禁止令は緩和されず、脱法行為は以然として煩らわしかつた。

ボードーパヤー王の失政

ボードーパヤー王の統治間にはなお混乱が続出してゐたが、王の狂信的振舞はいつそう明白になつてきた。王は異教徒を迫害し、飲酒者やアヘン常習者、また、いけにえとして家畜を殺す者、等に対して死罪を命じた。タウングー時代にもバイナウン王が飲酒やいけにえを厳禁した（学報28号81頁）こととやや類似した点はあつたが、ボードーパヤー王の場合はその嚴格さが極端であつた。仏教僧が王の行き過ぎた行為を和げようとした時には、僧会を改悪せんとする計画を講じたり、また僧院の領地を没収した。そしてなお白象崇拝は前例を見ないほど極端に行われた。

なお、軍事のための人員の徴発、及び宗教上の事業のためにも人民に強制労働を課した。殊に前述したミングン・パゴダの建立にはシヤン、モン、アラカン等の諸種族にまでそれが及んだ。そしてまた、1790～97年に渡る7年間、幾千のアラカン人を含む人員が王の直接監督の下で宮廷近く of 河にある一島に仮宮殿を設ける工事に強制労働をさせられた。かつてそこを訪れた Hiram Cox 船長に王は告げていうに、「毎夜、梵天界の帝釈天（^{タヂャー・ミン}Thagya-min:）は昼間の労働によって為された仕事を増加するために天より使者をつかわされた。」と。しかし、その苛酷な労働に疑

いをいだいな船長は案内されて、その仕事を視察した時、彼はれんがの上の所々にろうそくの落ちた形跡に注目して、天よりの使者は彼ら労働する者たちの仕事に対し人工的な助けの光を必要としているのではないかと考えた、ということである。

ビルマと中国との間には、1769年シンビューシン王の時代に交した講和条約によって、ボードーパヤー王の統治の期間中に数回に渡って使節の交換が行われた。その都度進貢の交換がなされ、中緬国境の摩擦はほとんど起らず、正規の対外関係が維持されていた。しかし他方、印緬国境は、タイ緬国境と同じく、無秩序な不穏地帯になりつつあった。その原因を探求すれば、ボードーパヤーによって要求される強制労働と徴発、及び地方官吏のどん欲がアラカン人を無謀な反抗に追い込んでいたのである。1794年には大規模な暴動が燃え上った。チタゴンに亡命してきたアラカン人たちは年を追って5万にも達し、ほとんど民族移動にも等しいものであった。そして彼らのうちには単なる避難民だけではなく、ビルマ軍に対する攻撃のためにイギリス領を基地とせんとする反乱分子も多く含まれていた。それら反乱集団は増強されたビルマ軍に向かって撃突したが、打破られ、5千のビルマ兵によって追跡され、^{ナーフ}Naaf 河（ビルマ名 ^{ナツ ミツ}Nat-myyit）を横ぎり、国境の英領内へ逃げ込んだ。

1795年にイギリスは初めてビルマに外交使節を送ったが、それまではかつてアラウンパヤーを訪れた代表者たちが利権を求めるために派遣されたに過ぎなかった。今回イギリスがビルマに使節を送ったのはビルマのアラカン併合によるものであって、当時の世界情勢から見れば已むを得なかったであろう。イギリスはフランスと必死の闘いの最中で、どこの国とも事を構える余裕はなかった。一方フランスはインドにおける足場を回復しようとし、またビルマで船を建造せんことを望んでいた。そこで、イギリスはインド諸王とフランスとの間を通過する往復信書を押取し、また、時たまビルマの港を利用してインド王に武器を売り込もうとするフランスの私掠船を拿捕した。ビルマはフランス人官吏と接触することに成功しなかったが、イギリスを共同攻撃するためにはインド諸王に使節を送っていた。このようにして1807年以後、ボードーパヤー王は定期的に太守やバラモンたちを使節としてインドへ送り、彼らはパットナ、ベナーレス、デーリ、ラホール、及びベシャワールまでも赴いた。その際、彼らは仏舎利・経典等のほか天文学、医学、その他諸科学に関する学術書を蒐集した。王はそれらサンスクリット語、ベンガル語、ナガラ語等にて書かれた書物をビルマ語に翻訳させた。イギリス側は初めは彼らに巡礼者としての旅の便宜を与えていたが、彼らが恐るべき^{*}マラッタ同盟と相通じていることを知ったとき、彼らをビルマへ送り返した。

*マラッタ同盟（Mahratta Confederacy）とはインドの中部高原から西部に住むヒンズー教徒の好戦的な混血種族であるマラッタ族が、ムガル帝国の強盛の時はこれに抑えられていたが、アウランゼーブ帝の死後、復興して、17～18世紀に土侯の同盟体を結成し、帝国の衰運に乗じて勢力をのばした。この頃、インドにおけるイギリスの計略はすでに著しく進んでいたから、勢力のおもむくところ自づから両者の間に衝突をきたし、前後3回（1775～82、

1803～5, 1817～9年)に及ぶ謂ゆる「マラッカ戦争」の結果、同盟諸国のあるものは英領に併合され、あるものは「王」の称号のみが許されてその実権を奪われ、かくてことごとく英の統治下に属するに至った。

ビルマに派遣されたイギリスの外交使節は1795年及び1802年にはCapt. Symes, 1797年にはCapt. Cox, 1803年, 1809年及び1811年にはCapt. Canning 等であった。その目的は英・ビルマ間の友好関係を設定し、種々の障害を取り除くことにあった。例えば、英領内とアラカンの間のジャングル地帯に出没してビルマ軍をてこずらせていたガチンビャン(学報37号31頁)の問題に関すること、また、止むを得ずビルマの港に入ったイギリス船を拿捕しないようにしてほしいという要求。この後者の件は1795年の条約に含まれていたのではあるが、履行されていなかった。というのは、ボードーパヤー王は条約というものを守らねばならない契約として見なさず、いつ何時でも任意に取り消し得る特惠であるという考えを抱いていたようである。また、王はどうしてもイギリス側の外交関係を設立することには誠意を示さず、当時イギリスのインド統治の中心地であったカルカッタへも答礼使節を送ろうとしなかったし、また、イギリス使節に謁見することもめったになかった。その理由は全く原則上の点にあった。即ち、ビルマ王はインド総督を相手にするのではなく、イギリス国王とならば、不足はない、という点にあった。このことはアラウンパヤー王の場合にも同じことが言える。(学報34号, 52～53頁)

ボードーパヤー王はインド総督をベンガルの太守〔Bengala-myōza:〕と称し、ビルマにおけるラングーン太守と同じ位いの地位であると見做していた。もちろんラングーンの太守もインド総督も太守であるという点に関しては変りはない。ただビルマの viceroy と the Viceroy (of India) の相違であるが、その格式や権限においては雲泥の差があった。即ち、ラングーンの太守はビルマ国王からすれば、奴僕としての扱いであり、その支配力も一地方に限られていた。従って、一国を左右するような戦争か平和かを決定するだけの権能を与えられてはいなかった。それに対してインド総督は以上の権限をもち、ビルマ国王と比肩し得る、あるいはそれ以上の強力な国王とさえ同格と見なされていた。

1818年、ボードーパヤーはチタゴンからダッカ及びカルカッタの北にあるムルシダバードまでの地をビルマへ引渡すようにとインド総督に要求した。その理由は、今やボードーパヤーがアラカン王の後継者になったからには、中期時代にアラカンがラーム及びチタゴンを支配下に置いていた。そして時にはダッカやムルシダバードにも侵入したことがある、というのである。しかし、その後長くそれらの地はモガル帝国に併合されており、その遺産相続人としてイギリス人が60年間その行政に当たってきたのであって、ボードーパヤーのアラカン占領中にもアラカン人の亡命者の引渡しをしばしば要求してきたという事実によってもイギリス側のこれらの地の領有権をビルマは認めていたものと見なしていたのであるから、今さらそのようなビルマ王の要求は当を得ないと判断して、イギリス側はボードーパヤーの要求を斥けた。

1811年、インド総督はビルマに使節を送ることを廃止した。それには二、三の理由があげられ

る。ハーヴェイ（P. 159）によれば、ボードーパヤーはインド総督がもつとりっぱな贈物をビルマ王に献上すべきであり、なおアラカン人亡命者たちをビルマ側に引渡すまでイギリス使節たちを人質として幽閉しておくことを命じた。また、インド総督はビルマ側の太守、例えばラングーン太守程度の者と交渉すべきであるという通告を受取ったので、インド総督はラングーン太守に文書によって抗議し、時には両国の国境官吏の間に会合を開くことを求めたけれども、何の結果も得られず、また文書に対する返答もなかった。このように一国の政府が他国の政府と交渉を保持することを拒む時には、困難な事態の調整は不可能となり、これが戦争の要因ともなりかねないのである。

以前にアラウンパヤー王がマニプール遠征を行なった後、シンビューシン王の時代にもマニプール侵略があったが、その後しばらくの間は平静な状態が保たれていたらしい。しかし、ボードーパヤー王の時に、マニプール土侯王 ^{チョー} ^{ダツ} ^{シン} Hkyaw-Gyit-Hsin とその弟である副王 ^{マー} ^{ダツ} ^{シン} Ma-Gyit-Hsin との間に王位にからんだ問題が起り、ボードーパヤーがその解決に当った。一時はおさまったかのように思われたが、その後、兄弟の間に再び紛争が起り、弟マージッシンはボードーパヤーに事情報告に来た。そこでボードーパヤーはその調停のために兄を召喚したが、それに応じなかった。王は軍を送って弟マージッシンを王位に即けた。兄チョーダツシンはイギリス領内へ難を避けた。

ボードーパヤー王の最後

1819年、王は治世38年、75才の年令にしてこの世を去った。彼は122人の子と、208人の孫を残し、彼の後継者となるべき太子が1808年に歿した時、彼の孫を世継ぎとして宣言し、王位継承問題は何の困難もなく解決された。

ボードーパヤー王の性格

ボードーパヤーはビルマ史上極めて有力な王の中に数えられる。しかし、王の性格はビルマ英傑としての長所短所の両面を余りにも明白に示している。私見として、彼の偉大さと自惚れ強さの点ではパガン朝時代のアラウンシトウ王（学報16号、67～73頁）にも比肩され得るであろうが、その欠点をさらけ出している点ではパガン朝46代目の悪王として知られるナラトウ王（学報17号、68～70頁）とも大した相異がないように思われる点が随所にうかがわれる。

^{バヂ} ^{ドー}
Bagyi:daw (1819～1837)

王位を継いだバヂドー王は1821年旧都インワを修復し、1823年都をインワへ遷した。従って、インワは第四度目最後の王都となった。

英・緬戦争の要因

当時、アッサム王国はブラマプトラ河沿いに西はゴアルパラから東はサディヤに渡っていたが、かつて強大を誇った王国も今は崩壊の状態にあった。その上、ボードーパヤー王の時代に、アッサム王 ^{チャンドラ} Chandra ^{ガンダー} Gandahsin ^{シン} （または、Chandra Kenta-Singh）を大臣高官たちは謀叛によって王を廃位したので、アッサム王はボードーパヤー王に援助を求めてきた。そこで、ボードーパヤーは軍を派してチャンドラ・カンダーシンを王位に即けたが、その後ビルマ軍が引上げるや再びアッサム王は王位を追われたので、再度1819年に（この時にはボードーパヤー王はすでにこの世を去り、バヂドー王の時代になっていた）ビルマ軍はアッサムに侵入し、チャンドラ・カンダーシンを即位させた後、そこに駐屯し、ビルマの勢力をそこに延ばした。

ビルマ軍はそこの住民を殺し、王に相談もせずに種々な命令を発するような行動をとるようになったため、アッサム王は部下と共にイギリス軍内に走った。イギリス側は王が政治亡命者であるという理由で彼をビルマ軍に引渡すことを拒絶したので、ビルマ軍はブラマプトラ河の谷間のイギリス領内に侵入した。イギリス側はも早平和的解決方法を講じることは無駄であると悟った。

この間、ビルマ軍は3万のアッサム人をビルマに連れ去り、また、アッサムの住民を威嚇するために男女、子供たちを竹矢来の中に追い込み、彼ら数百人を焼き殺した。ビルマ軍の暴挙はアッサムの到る所においてその人口を著しく減じさせ、 Manar Upadrab “The Oppessions of the Burmese” (Harvey, P.161) の語はそれ以後永くアッサム人を戦慄せしめた、という。

チタゴンのイギリス人知事は英領とアラカンの国境をなすナーフ河中の自領寄りに位置する ^{シャープリ} Shahpuri ^{シン} 島（ビルマ名 ^マ Shin-ma ^{ビュー} hpyu-gyun ^{ヂュン}）に12名のインド警官を前哨に当らしめていた。それは彼の管下の村人たちが小舟でその河を下る途中対岸のビルマ軍によって発砲され、時には射殺された。それ故、彼らは危難を恐れて仕事に行くこともできなかったからであった。しかし、その後6ヶ月間は事態は平穏であったが、1823年9月23日～24日にかけての夜半、一千のビルマ兵が突然その島に來襲し、前哨隊を一人残らずせん滅してしまった。ビルマ軍のこの無法な行動がインド総督に報告されたので、総督はビルマ王に書面を送り、このような行為がどのような結果に至るかを反省するように求め、拒否の言い逃れをする暗示さえ与えた。けれども、例によって、ビルマ王からは何の返答もなかった。

ビルマ側から仕掛けたシャープリ島事件は來たるべきビルマのベンガルを併合せんとする企図から見れば、ビルマの対英戦の序幕に外ならなかったのである。バヂドー王は戦争の出費を好まなかったけれども、もし尠大な富を有すると云われるカルカッタを略奪することができれば、その失費を補って余りあろう、と考えたであろう。また、青白い軟弱そうに見えるイギリス兵は戦争には何の役にも立たないであろうと見くびって戦勝はビルマ側にあるものと予想していたようである。

ところが、ビルマの国民を戦争に導いたのはバヂドー王ではなかった。王が戦争に巻き込まれ

たのであった。バヂドー王はそれまで戦争を回避せんと努力してきたのであるが、1824年1月、勝ち誇れるビルマ軍は^{ビク ラム プル} **Bikrampur** のイギリス国境を越えて^{カ チャール} **Cachar** に殺到した。その時インド総督はなをシャーブリ島事件に対するビルマ側の返事を待っていたのであるが、そこへカチャールの前哨部隊から戦闘を報ずる使者が次から次へと到着した。1824年3月5日、彼はすでに戦争状態に入っていることに気づいた。遂に第一次英緬戦争の火蓋は切られた。以後第三次まで続く英緬戦争は、東南アジア諸国の中では、比較的西欧勢力との接触の少なかったビルマにおいて、その歴史の方向を大きく変えるのである。

ここに勇猛を以て知られるビルマの名将^{マハー バン ドウーラ} **Maha Bandhula** が出現するのであるが、彼はすでに対マニプール戦にもアッサム戦にもビルマ軍を指揮していたのである。

●参考文献

- ・ Dr. Kyaw Thet : Pyi-daung-su Myanmā Naing-ngan Thamaing (1962)
- ・ U Tin U : Myanma Naing-ngan-daw Thamaing: Sanpya (1957)
- ・ U Hop: Kya: : Myanmā Yāzawin Akyin (1837)
- ・ U Min Han : Myanma Naing-ngan-daw Hket-laik Yazawin (1937)
- ・ Maung Ne Nywan : Kon: baung-Hket-Myanma-pyi (1833)
- ・ D. G. E. Hall ; Burma (1950)
- ・ G. E. Harvey : Outline of Burmese History (1947)
- ・ G.E. Harvey : British Rule in Burma (1925)
- ・ Maung Htin Aung : Burmese Drama (1947)
- ・ 荻原弘明著：ビルマにおけるキリスト教伝道の初期の歴史について（昭30）
- ・ ハーヴィ著五十嵐智昭訳：ビルマ史（1943）
- ・ 著者不明：A guide to the History of Burma
- ・ 寺西五郎著：語理語源（昭和37）
- ・ U On: Shwe : That-pon Abhidhan
- ・ J.A. Stewart & C.W. Dunn : Bur-Eng Dict. Part 1 - 4 (1940~1963)
- ・ Judson : Bur-Eng-Dict. (1953)
- ・ Tekkatho Myanmā Abhidhan Vol. I - V
- ・ 水野弘元著：パーリ語辞典（1954）
- ・ 新村出編：広辞苑